

次の文は、江戸時代後期の国学者、藤井高尚が記したものである。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

\*俊恵法師は、ただ歌をば、をさなかれといへり。この人、歌の情をよくしれるなり。をさなき人は思ふ情ひとへにふかく、おろかなる事をぞいふ。歌の情もさやうなればなり。

\*山部の大人の歌に、

ふじのねにふりおける雪はみな月の望もちに消ぬればその夜ふりけり

とよまれしも、<sup>(1)</sup>おろかなる情をいはれたるなり。さるからにいといとあはれふかくきこゆ。この歌は、ふじの雪のこととはに消えぬ事をいへるなり。<sup>(2)</sup>それを「みな月の望にも消えぬふじのしら雪」とよみたらんには、かいなでの歌よみなるべし。「望に消ぬれば」といへるなん、いひしらずをかしき。今この歌の情を考ふるに、ふじの雪の常に消えぬを見て、いみじき高山なれば、寒くて消えざることわりはしらぬをさなきころになりて、なべての雪といふものは、ふりては消え、消えてはふれば、ふじの雪もかならずさやうならんに、消えしをりの見えぬはあやしと、しばしながめやすらひて思ひえたり。ふじはいみじき高山なれば、雪も消えがてにして、<sup>(3)</sup>こと所とはことなるべし。この山にふりおける雪は、みな月の望のあつささかりのかぎり消えて、その夜ふりけり。<sup>(3)</sup>さるからに消えしをりの見えぬにこそと、あらぬ事をいへる歌にて、いといとあはれふかきなり。まことに歌の情は、かくこそあらまほしけれ。をかしともをかしく、めでたしともめでたく、世々の歌よみのさらにおよびがたき所なり。赤人は人麻呂しもの下にたたんことかたしとも、歌にあやしくたへなりともいはれつる貫之主ぬしは、歌のさまをよくしられたる人なりとぞ思ひしられける。さるを万葉集のむかし今の注しゆさくどもに、<sup>(4)</sup>この「望に消ぬれば」の歌を、ふじの雪はまことにみな月の望に消えて、その夜ふるもののやうにこころえて、こともなげに説とけるは、むげに歌の情を見しらぬ説となりけり。まことにさやうならんには、山部の大人のとも思はれぬつたなきただこと歌なり。雪の消ゆばかりあつからんに、いかでかその夜ふるべき。さはあらぬ事を思ひいふが、あはれなる歌の情なり。それを見しらぬは、<sup>(5)</sup>いにしへのよき歌のさまをたふとびしたはざるゆゑに、心のおよばぬにぞありける。さやうに古歌をなほざりに見過ぐしては、すべて柿本、山部のふた

りの大人の歌のあはれなる情のふかき事は、さらにしられじ。この大人たちのところをえて、つらつら思へば、歌もて道々しき事いふは、いみじきひがことなりけり。道々しきことは、文にかきてこそいふべけれ。いにしへよりよき歌には、おのがこころえがほなる事、<sup>\*</sup>たけきこころなどを、さらにいはざるも、人のあはれと思ふべくよむが歌なればなり。

(『三のころべ』より)

注(\*)

俊恵法師||平安時代末期の歌人。源俊頼の子。

山部の大人の歌||「山部の大人」は山部赤人。「大人」はその人を敬つていう語。この歌は『万葉集』に出ている。

人麻呂||柿本人麻呂。

貫之主||紀貫之。「主」はその人を敬つていう語。『古今和歌集』の「仮名序」で山部赤人、柿本人麻呂らについての批評をしている。

注さく||注釈書。

たけき||ここでは、自分が利口だと誇るさま。

問一 傍線部(1)はどのような「情」か、説明せよ。

問二 傍線部(2)について、指示語の内容を明らかにして現代語訳せよ(「みな月の望にも消えぬふじのしら雪」も現代語訳する)。)